

向善説

2021. 8. 6

人は善なのか悪なのか。この問題に関しては、性善説と性悪説というものがある。よく聞く言葉である。

性善説とは、人間の本性は、基本的に善であるとする倫理学における学説である。これを唱えたのは孟子である。孟子の性善説とは、あらゆる人に善の兆しが先天的に備わっているとする説である。善の兆しとは、端的に言えば、善となるための可能性である。

一方、性悪説とは、荀子が、孟子の性善説に反対して唱えた人間の本性に対する主張である。ここで言う悪とは、人間は様々な意味で弱い存在という程度の意味であり、悪＝罪（犯罪・悪事）という意味ではない。荀子は、人間の本性は、欲望的存在にすぎないが、後天的努力により公共善を知り、人間の本性は根本的に変えられないとしても、礼儀を正すことができるとして、性善説同様に教育の重要性を説いている。

昔から、子どもたちの姿を見てきているが、人は善か悪か、性善説か性悪説かというのと、どうもどちらもじっくりこない。何か違うなとずっと思ってきた。人間の本性が善か悪かは分からないが、みんな善に向かって生きようとしていること自体は間違いない。誰もが失敗や間違いをしながらも、よりよく生きようとしている。もしかしたら、この世界に悪は成り立たないのかもしれない。

そんなことを考えていたところ、最近、「向善説」という言葉に出会った。ああ、これだったのかと思った。性善説でも性悪説でもない「向善説」である。学校は、学校の教員は、この「向善説」を教育の根幹に据えるべきなのではないか。

誰でも、もちろん子どもたちも、よりよく生きようとしている。失敗や挫折を経験しても、やり直そうとしている。前に進もうとしている。だれでもよくなりたいのである。そう考えると、善に向かうというのは、じっくりくる。

子どもたちには、向善説が合う。未熟な子どもたちである。失敗はするだろう。叱られることもあるだろう。挫折も経験するだろう。立ち直れなくなりそうなことも起きるかもしれない。調子に乗りすぎてしまうこともあるだろう。いろいろあったとしても、反省し、自分を顧みながら、よくなろう、よくしようと思って前に進むのが、子どもというものである。

そう考えると、善の兆し、善となるための可能性が十分あるのが、子どもなのではなかろうか。やはり、子どもというのは、可能性に満ちた存在なのである。その可能性を伸ばせるかどうかは、保護者だけでなく、教員の手腕にかかっている。やりがいはあるが、責任重大である。

一つの考え方ではあるが、教員もかっこつけずに、失敗や挫折を繰り返しつつ、「向善説」の考え方でいけばいいように思う。子どもたちとともにである。